

ふいんてつく通信

～ Vol.1 ～

キャッシュレス社会とともに発展する生体認証決済

Fintechとは、金融(Finance)と技術(Technology)を組み合わせた造語です

nikko am
fund academy

海外で盛んに進んでいる「フィンテック」、最近では日本の報道でもよく見かけられるようになりました。フィンテックとは、金融と技術を組み合わせた造語で、IT(情報技術)を駆使した金融サービスを指します。分かりやすい例では、クレジットカードやモバイル決済、クラウド家計簿などがこれに当たります。そこで、「ふいんてつく通信」では、身近にあるフィンテックの話題をご紹介します。第1回目は、進むキャッシュレスと生体認証決済についてです。

■ キャッシュレス決済は「手ぶら」「顔パス」の時代へ

物理的な現金ではなく、デジタル化された価値の移転で決済するキャッシュレス決済は、消費者に利便性をもたらし、事業者の生産性向上にもつながる、といったメリットがあります。すでに、キャッシュレス化が進んでいる国からは、キャッシュレス化の恩恵やメリットが、社会・個人に関わらず広範囲にわたることが報告されています。日本でも産官学の連携で環境整備を急ピッチで進めており、政府は、現在約20%のキャッシュレス決済比率を、大阪・関西万博が開催される2025年までに約40%、将来的には世界最高水準の約80%に高める目標を掲げています。

利便性に優れているキャッシュレス決済も、現金と同じ課題やリスクがあります。それは、端末やカードを紛失したり盗難にあった際、他人に利用されてしまうという点です。キャッシュレス決済は現金と異なり、ハッキング(コンピュータに不正侵入)されてデータを奪われる可能性があるのです。また、多くのキャッシュレス決済手段は、QRコードを呼び出したりパスワードを入力する必要があるため、「意外と使い勝手が悪い」と感じるユーザーも少なくありません。そこで、セキュリティを向上し、さらなる利便性を高める手段として注目されているのが、「生体認証技術」を活用したキャッシュレス決済です。



※写真はイメージです

■ キャッシュレス決済は「手ぶら」「顔パス」の時代へ

生体認証決済は、クレジットカードや決済アプリなどを使わずに、本人の生体情報だけで決済できる新しいタイプのサービスで、日本でもすでに導入されています。

長崎のテーマパーク・ハウステンボスでは、指紋情報で決済する「Liquid Pay」が利用されており、正確な本人確認が必要となる自動販売機などへの準備も進められています。さらに、日立製作所は、指紋よりも偽造にくい指静脈認証で決済するシステムの実証実験を行なっています。また、富士通グループの手のひら静脈認証センサー「PalmSecure」は、センサーに触れることなく認証が可能で、2004年から金融機関のATMに導入されています。同センサーは衛生的で外的要因の影響を受けにくい特徴もあり、世界約60カ国(セキュリティ対策の利用を含む)で利用されています。



※写真はイメージです

一方、NECは顔認証で決済するシステム開発を進めており、一部のコンビニエンスストアや社員食堂などの決済に導入され始めています。なお、同システムは、2020年に開催される東京五輪で、大会関係者の会場入場時の本人確認システムとして採用することが決まっています。五輪では史上初となる試みです。

事前に生体情報とクレジットカードや銀行口座などを紐付けておく必要はありますが、生体認証は偽造が難しく、認証精度も高いことに加え、手ぶら・顔パスで決済できる利便性もあり、広く普及していくことが期待されます。

上記銘柄について、売買を推奨するものでも、将来の価格の上昇または下落を示唆するものでもありません。また、当社ファンドにおける保有、非保有、および将来の個別銘柄の組み入れまたは売却を示唆するものでもありません。

■当資料は、日興アセットマネジメントがフィンテックに関する情報についてお伝えすることを目的として作成したものであり、特定ファンドの勧誘資料ではありません。また、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。なお、掲載されている見解は当資料作成時点のものであり、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。■投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産には為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。